

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑬

筆者が松山外環状道路空
港線に関わったのは前職に
在籍していた約10年前にさ
かのぼる。記憶をひもとく
と、遺跡がほとんどないこ
の地域で試掘調査をしても
遺跡・遺物には当たらない
だろうと思っていた。しか
し、先行して松山市教育委
員会が行った試掘調査で
は、中世の土器や古墳時代
の須恵器が出土している
という情報が入っていた。そ
れから数年かけて、試掘調
査に数十回通い、遺跡の有
無の確認作業を繰り返し
た。

沖積低地であり、重機で
掘削して深さ1メートル近く砂の
層を検出し、遺跡がないこ
とを確認することが大半で
あったが、南吉田南代遺跡、
東垣生八反地遺跡、余戸柳

井田遺跡、余戸中の孝遺跡
の4カ所では、古墳時代、
中世の遺物を確認し、正式
な発掘調査が実施された。

松山平野の製塩土器



松山市南吉田南代遺跡2次調査で出土した
製塩土器(古墳時代初頭)＝県教育委員会蔵

「芸予海人」の生活示す

一番印象に残っているの
は試掘調査の最終段階で確
認した南吉田南代遺跡であ
る。掘削深度が約4メートル
の深い試掘溝を掘削してい
ると、古墳時代初頭の土師
器(はじき)の破片が良好
な状態で出土する土層を確
認した。先に試掘調査を行
っていた市教委の調査でも
同時期の土器が確認されて
いた。当時はなぜ、こんな
深いところから土器が出土
するのか悩んでいたが、数
年後に実施された発掘調査
では、地表下約4メートル近
の深い場所にある環境変化の
少ない湿潤な土壌から、弥
生時代終末期から古墳時代
初頭にかけての土器群が、

良好な状態で出土してい
る。

また、今回紹介する製塩
土器のように海岸部に暮ら
した人々の生活を示す遺物
も出土している。

見つかったのは、外面に
タタキ痕跡が認められるこ
とから、今治平野・芸予諸
島周辺に多い、脚台付製塩

土器の脚台部分であること
が分かる。土器による塩づ
くりは、①高い濃度の海水
(鹹水＝かんすい)を得る
採鹹(さいかん)②鹹水を
製塩土器で煮詰め、結晶塩

を得る煎熬(せんこう)③
結晶した塩を焼いて、不純
物を取り除く焼塩という工
程で行われた。この土器は、
煎熬の過程で使用された土
器で、本遺跡近くで塩づく
りが行われたのか、今治平
野・芸予諸島周辺で使用さ
れた土器がここまで運ばれ
たのかは現状では分からな
い。

しかし、松山平野では伊
予市上三谷篠田遺跡等数遺
跡のみで、芸予諸島周辺で
製作された製塩土器が確認
されており、「芸予海人」
の活動の一端と考える。こ
のことからも当時の「芸予
海人」の交易活動として「塩
づくり」があったことがう
かがえる。

(専門学芸員・富田尚夫)

◆ 製塩土器は、テーマ展「松
山外環状道路と遺跡の調査
―松山平野西部の遺跡―
(2025年3月23日)
で展示中。

〈随時掲載します〉